

バクマン。 勝利学（1）

門脇 正法

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

まえがき

『バクマン。』の感染力

私は『バクマン。』に感染してしまった。いや、正確には『バクマン。』の「本気」に感染した。そして今、日本中がコミックやアニメを通じて、『バクマン。』の「本気」に感染しつつある。

なぜならこの作品からは、マンガ家になろうとする二人の主人公、真城最高（サイコー）と高木秋人（シュージン）の「本気」が溢れ出しているからだ。架空の人物であれ、実在の人物であれ、その「本気」は「本気」であればあるほど、他人を感染させないではいられない。

『バクマン。』の中で、サイコーとシュージンはネームを描き、ペン入れをして、完成原稿を編集部を持ち込む。編集者と打ち合わせをし、新人の「登竜門」である赤マルジャンプに掲載を決め、そこでの読者アンケートの結果に一喜一憂する。ついには、

王道のバトルマンガでライバルに競り勝ち、難関の編集会議を経て、本誌での連載を手にしていく。

こうして連載まで漕ぎ着けることができたのは、二人が「本気」だったからに他ならない。この作品を読んだ読者なら説明するまでもないが、日本で最も競争の激しいマンガ雑誌、少年ジャンプでの連載は、運だけでは勝ち取れるわけがない。かといって作画やストーリー作りのテクニクがあればそれで通用するといえるものでもない。運もテクニクも大事だが、連載という成果を勝ち取るにはそれだけでは足りない。

大事なのはどれだけ「本気」になれるかだ、と私は思う。

もちろん、そうして連載を勝ち取ればゴールというわけではない。

「大当たりするか 何発も当てるか 一生食えればマンガ家／そこまできなければただの博打打ち」と作中でサイコーが言うとおり、本物の「マンガ家」になるために、今もなお二人は「本気」を出しまくっている。

このマンガを読みながら、サイコーとシュージンの「本気」に、私はスポーツの世界で活躍するトップアスリートの「本気」をオーバーラップさせていた。

「本気」のパワーを感じる

私はこの『バクマン。』が連載され、その『バクマン。』の舞台になっている少年ジャンプで、『ジャンプスポーツスタジアム（略称・ジャンスタ）』というスポーツ特集の記事を二〇〇一年から書かせてもらっている。『ジャンスタ』はマンガ作品ばかりの少年ジャンプの中でも、活字ばかりの異色の記事だ。

早いもので、もう連載を始めてから一〇年になるが、これまでに野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、テニス、陸上、競泳、フィギュアスケート、スピードスケートなどの競技で活躍する、数多くのトップアスリートにインタビューをしてきた。

その中でも印象深いインタビューの一つが『ジャンスタ』の二〇一〇年サッカーW杯南アフリカ大会直前応援特集。私はこの記事の中で日本代表のFW岡崎慎司選手、DF長友佑都選手、MF中村憲剛選手を直撃することになった。

ご存じのとおり、南アフリカ大会本戦への出場が決まってからの日本代表の目標は、岡田武史監督が掲げた「ベスト四」だった。しかし、直前の親善試合、壮行試合に連



「日本一のマンガ家になる!」。
サイコーとシュージンたちの「本気」は、不可能を次々と可能にしていこう!
コミックス1巻203ページ

敗したことで、マスコミだけでなくサポーターまでもが日本代表に対して冷ややかな視線を送るようになり、「イマイチ盛り上がりに欠けるW杯になりそうだ」という雰囲気^いが支配的になっていた。

そんな中でのインタビュだったが、私がインタビュした三選手ともネガティブになるどころか、「本気」度全開で話してくれたことに私は強い印象を受けた。

たとえば岡崎選手は「日本にしかできない、走り回って、パスをつないで、全員で守って、全員で攻撃を決めるサッカーを見て欲しい！」と語ってくれた。また、長友選手は「運動量で負けることなく、攻撃にもどんどん参加して、ボールを取られたらすぐ戻って、すぐ取り戻すプレーが自分のストロングポイントである」と答えてくれた。さらに、「23名のメンバーが集まって一枚岩になれば、目標のベスト4の可能性はあるし、その可能性を追うのは、誰にも邪魔できない！」と、中村選手は言い切ってくれた。

そう！

世間の白けムードなどどこ吹く風、大会を目前に岡崎選手、長友選手、中村選手たちはすでに「本気」モードになっていた。



亜城木夢叶と新妻エイジ。両者の関係は永遠のライバルにして、友。
この二つの天才のぶつかり合いが
少年ジャンプ全体を活性化していく！
コミックス10巻160ページ

つまり、彼らにとって「ベスト四」達成はけっして不可能なもの、手の届かないところにあるものではなく、「どのよう^にに手繰^り寄^せていけばいいのか」という具体的な目標として見えていた、というわけなのである。すでにこの時点で、マスコミやサポーターからの雑音は彼らにとって意味のないものになっていた。W杯で「本気」のプレーをすることだけが、彼らのすべてになっていたのだ。

事実、W杯本番の舞台では岡崎選手が予選グループ三試合目のデンマーク戦で、相手の追撃を振り切る三点目のゴールを決める。長友選手は予選グループの三試合と決勝トーナメントの一試合、計四試合にフル出場し、縦横無^尽の活躍で世界の注目を集める。中村選手も決勝トーナメントのラグアイ戦でW杯初出場を果たし、得意のスルーパスで何度も好機を演出することになる。

たしかに結果から言えば、日本代表は「ベスト四」という当初の目標を達成はできなかった。それでも日本代表は予選グループを二勝一敗の二位通過、決勝トーナメント一回戦では、前後半延長も含め一二〇分間の死闘を繰り広げ、PK戦で惜敗。二〇〇二年のW杯日韓大会以来、二度目のベスト一六という成績を残した。

この流れを受け、マスコミは手の平を返したように日本代表を絶賛、サポーターも

深夜から早朝まで日本代表の応援に声を嗶らし、一ヶ月間にわたったサッカーの世界最高峰の戦いを多くの人が楽しむことになる。まさに、これは岡崎選手、長友選手、中村選手、いや、日本代表の全選手と岡田監督をはじめとする全スタッフが、今回の目標に「本気」で取り組んだことで生み出された変化と言えるだろう。つまり、彼ら代表の「本気」が日本全体に感染し、日本中の人々を熱くしたのだ。

そう——「本気」は感染するものであり、広がるものであり、巻き込むものなのだ。そして、サッカー日本代表の健闘をもたらした、この「本気」の力と同じパワーを、私は『バクマン』の中に登場する主人公たち、サイコー、シュージン、新妻エイジ、亜豆美保からピンピンと感じるのだ。

『バクマン』の面白さは今さら説明するまでもない。いちいち言葉で語るより、マングそのものを読んでもらったほうがいいに決まっている。

でも、『ジャンスタ』の連載を通じ、世界の頂点を極めようとしているたくさんの若きトップアスリートたちに出会ってきた私には、私なりの『バクマン』論が書けるのではないかと思っている。

それは一言で言えば「本気」の力だ。

スポーツの世界でトップを目指すための「本気」は、マンガの世界でトップを目指す「本気」とイコールだと私は思っている。そして、その「本気」の力は部活や受験や恋愛、仕事や結婚や家庭などのあらゆる日常の世界と切っても切れない関係にある——そのことを本書の中であらわしていければと考えている。

『バクマン。』の「本気」を満載したこの『バクマン。勝利学』に、一度感染しても
らえれば本望だ！

二〇一一年一月吉日

門脇 正法

バクマン。勝利学
門脇正法 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,200 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7211-4

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ!](#)